

国立音楽大学 音楽学部入学者選抜 出題意図

(2025年度)

*各専修（専攻）および共通科目の試験課題・試験問題について前年度の出題意図を公開します。
今後の受験勉強にお役立てください。

国立音楽大学が期待する学生像

国立音楽大学は、1・2年の基礎課程において、音楽の基礎能力と基礎知識を徹底的に鍛えた上で、3年からの専門課程では意欲、能力、努力に応じて、学科・専修の枠を越えたより深い専門教育、卒業後の進路を視野に入れた多様な目標に応じた教育を推進する、ユニークなカリキュラムを採用しています。その意味で、本学が求めるのは、単に専攻の勉強を4年間続けるというだけでなく、高い目標を持ち、自らの能力を常に高め、新たな可能性に積極的に挑む学生、専攻の基礎能力をしっかりと身につけ、基本的な学力・理解力を持ち、意欲的に勉学に取り組む学生です。入学者選抜における専攻の試験はそれぞれ、1・2年の基礎課程の専門科目を履修できる基礎能力をはかり、共通科目は基本的な学力・理解力を測るために設定されています。本学に学ぶ意欲のある皆さん、基礎・基本を充分に鍛えて挑戦することを願っています。

【演奏・創作学科】

声楽専修

声楽

声楽を学ぶ上で必要な基本的能力(発声法や表現力、テクニック等)を持ち、将来成長する可能性のある人材を見い出すため、イタリア古典歌曲、ドイツ歌曲、日本歌曲等を課題として判断します。

コーラルユーブンゲン

コーラルユーブンゲンの視唱から音程、リズム感、フレージングなど、声楽を学ぶ学生として必要な基礎力について判断します。

鍵盤楽器専修（ピアノ）

ピアノを専門的に学ぶ上で必要な三要素(リズム、メロディー、ハーモニー)を理解して演奏しているかどうかを判断するために、ピアノ音楽の主要なレパートリーや重要な作曲家の作品を課題としています。演奏審査により、技術的な基礎力だけでなく、音楽性や作品に対する理解力、表現力を総合的に評価します。

鍵盤楽器専修（オルガン）

オルガンを専門的に学ぶために必要な、基礎的なテクニックが身についているかを判断します。

課題曲では、バッハを重要視していますが、これはオルガニストにとって最も重要な作曲家であり、ポリフォニー奏法の熟達度を見るのに最適と考えるからです。日本においてはオルガンを学ぶ機会や環境が必ずしも整っているとは言えず、そのような中で専門的にオルガンの勉強を志す受験生のために、ピアノでも受験出来るよう選択肢を設けています。

鍵盤楽器専修（電子オルガン）

楽曲演奏

電子オルガンの課題曲は、以下の留意点にこだわり、クラシックの作品より選曲し、三段譜に編曲したものを使用しています。

- 1) テクニカルな部分と歌わせる部分が両方存在すること。
- 2) テンポを微妙に振り動かして演奏する部分が存在すること。
- 3) 強弱のメリハリがはつきりしていて、強い部分ばかりでなく、弱い音量でのタッチを駆使して美しく歌わせる部分が存在すること。
- 4) 自由曲で近現代の作品が多く見受けられるため、課題はロマン派までの作品中から選曲すること。

課題曲の演奏は、スコアリーディングの基礎的な力が要求されます。また、いい音色の組み合わせを創り上げることも重要であるため、これらの力を電子オルガンの機種によって異なる機能に左右されることなく発揮できるよう、考慮された編曲になっています。

即興演奏

以下の点について基礎力があるかどうかをみます。

単旋律を見て、短時間で基本的な和声付け。縦のコード付けのみではなく、横の流れを重視した対旋律を付ける。メロディーの変奏や展開。一曲としてまとめる力や演奏力。

和声

電子オルガンの編曲及び創作に必要な、和声法の基礎力をみます。バス課題、ソプラノ課題共に、近親転調を含みます。

弦管打楽器専修（弦楽器）

各課題の演奏により、大学で弦楽器を学ぶ上で必要な基礎力と、今後の成長力、各種アンサンブル授業への対応力等を推察し、将来演奏活動に携わる可能性が期待できるかなどを判断します。

弦管打楽器専修（管楽器）

すべての楽器にスケール(音階)が課題に出されています。調を理解しているかだけではなく、音色、リズム、音程はもちろんのこと、音楽性までもがスケールを演奏することによりわかります。

次にエチュードまたは曲を演奏します。音色を含めた演奏技術だけではなく、いかに楽曲分析をしているかが試されます。曲の場合は頭の中で伴奏(リズム、ハーモニー)が鳴っているかも問われますので、あえて伴奏はつけません。

これらのことは、入学後必修となるアンサンブル、吹奏楽、オーケストラの授業に大いに役立ちます。

弦管打楽器専修（打楽器）

打楽器奏者にとって必要な基礎的技術はもちろんのこと、入学後初めて経験するであろう打楽器類の多岐にわたる奏法にも、柔軟に対応できる素養を身につけているかが問われます。

ジャズ専修

ピアノ、ベース、ギター、サクソフォーン、トランペット、トロンボーン

- 1) スケール課題では、受験生自身が決めたテンポで音楽的に演奏することを求めます。
- 2) 課題曲では、楽器の基礎的なテクニックと譜面を正確に演奏できる能力、そしてジャズ特有のスイングするリズムをふんだんに演奏力を判定します。
- 3) 協奏演奏課題では、基本的なコード進行で形成された短い楽曲を即興演奏します。ここではコードやスケールの理解力、柔軟な表現力が問われます。

ドラムス

- 1) 基本となるスティックコントロール、正しく、美しいフォームで演奏できているかというポイントを重視します。スネア・ドラムによる基礎奏法

課題では、正確な読譜力と、基本的なテクニックを判定します。

2)課題曲では、ジャズの基本となるスイングのリズムの演奏、譜面を正確に演奏すること、そしてメロディーに対するアンサンブル能力が問われます。

3)即興演奏課題では、自分の好きなリズム・フィギュアを駆使したドラムソロを課します。小節数の把握、テンポキープをしながら打楽器ならではの表現力を求めます。

作曲専修

和声

バス課題:

1)全体の調的構成を理解しているか、2)主題、動機を活用し展開できているか審査します。

具体的には、主題の導入が適切に行われているか、主題と対旋律の関係が理解できているか、保続音上の書法が習得できているか等です。各声部の横の流れと縦の響きの充実を両立することが大切です。

ソプラノ課題:

1)全体の調的構成を理解しているか、2)課題のソプラノに対して、適切な和音設定と連結ができているかを審査します。

具体的には、終止の場所と種類が的確か、非和声音と和聲音の識別ができているか、借用・偶成和音、主題や動機の活用が適当か等です。バランスのよい響きを作ることが大切です。

作曲課題

与えられた素材を展開する能力、適切な響きを形成する能力、構成力などを審査します。

ピアノ初見視奏

基礎的なピアノの演奏技術と初見演奏の能力が、作曲を学ぶ者に求められる基準に達しているかを審査します。

聴音

本専修での学習を進める上で、前提となる基礎的なソルフェージュ能力を審査するために行います。

コンピュータ音楽専修 *

志望理由を含む入学後の学修計画書

国立音楽大学で学ぶコンピュータ音楽とは、コンピュータ技術と音響技術、創作技術を併せて取り組む、テクノロジーを用いた新しい芸術表現の模索です。そしてその成果を創作や研究、ひいては広く音の世界に応用してゆける広義の「音楽家」を目指します。入学者選抜においては、コンピュータ音楽に関する現時点での経験や能力よりも、むしろ知的好奇心や今後の創作、研究への意欲を問います。そうした点に留意して学修計画書へご記入ください。

口述試験

演奏と作品解説:

選曲と実際の演奏を通して、これまでの音楽経験をみます。また演奏した作品について、漠然とではなく音楽的特徴をとらえて分析的に取り組めているかを、解説から判断します。

提出作品のプレゼンテーション:

作品のクオリティよりもむしろ、試行錯誤しながら実際に創作を試みているという積極性や、プレゼンテーションにおいて自分の試みを第三者へ適切に説明できるかを判断します。

課題図書:

内容を理解しているか、問題意識を持って講読できているか、自分自身や現代社会と図書の内容との接点において意見を述べられるか、などを問います。

そのほか口述試験においては、学修計画書に書かれた内容について質問します。

*コンピュータ音楽専修は、2026年度入学生より音楽デザイン専修となります。

【音楽文化教育学科】

音楽文化教育専攻 音楽療法専修

小論文

面接

大学では、臨床的な音楽技能や音楽療法の基礎を勉強することはもとより、実践の場で様々な障害状況や疾病等にある方々に接する際の適切な態度や心構え等を学びます。音楽療法に取り組むためには、しっかりした動機や多くのことを学ぼうとする態度、様々な関係者への思いやりの心を持つていてることが重要です。

入学者選抜では、基礎的な表現能力やバランスのとれた知識力を確認するとともに、小論文を通して音楽療法に関する知識や考え、思い等を読み取ります。面接試験では、音楽療法に関する動機や熱意を尋ねます。

音楽文化教育専攻 音楽情報専修

小論文 ※

文庫本見開き2頁分ほどのテキストに、問い合わせが添えられています。多くの場合、テキストの論旨に関連する自分自身の体験を交えて、問い合わせについての考えを述べることが求められます。テキストを正確に理解する力、知識と経験に基づいて独自の考察を行う力、それにより導き出した意見・主張を論理的かつ明確に表現する力が重視されます。

※2026 年度入学者選抜では、一般選抜(B 日程)でのみ、この「小論文」は事前提出ではなく、入試当日の対面(またはオンライン)実施となります。試験時間は 90 分です。辞書などの持ち込みはできません。問題の傾向は事前

提出の場合と変わりません。ふだんから音楽に関する本や新聞記事などを幅広く読んでおくと良いでしょう。

面接・演奏

面接では、本専修を選ぶに至った経緯や動機、また本専修での学びに対する意欲や期待について口頭で尋ねるほか、およそ3分間を目安に、何らかの演奏(音楽的パフォーマンス)を行なっていただきます。楽器演奏、歌、弾き語りなど、形式やジャンルは問いません。実技系の学科と違って一定水準以上のパフォーマンス能力を求めているわけではなく、あくまで音楽の研究に携わる学生としての資質、広い意味での音楽性を確認するためのものです。自分しさを表現できる音楽的パフォーマンスを用意してきてください。

※2026年度入学者選抜では、「面接、プレゼンテーションまたはパフォーマンス」となります。面接に先立ち、自己アピールとして、5分程度のプレゼンテーションまたは3分程度のパフォーマンスを行なっていただきます。テーマや内容は自由です。

プレゼンテーションの例:関心のある作曲家やアーティストの紹介、印象に残った本の紹介、任意のテーマによる研究発表、自作した音楽作品や映像作品の紹介、音・音楽・楽器等に関する分析

パフォーマンスの例:楽器演奏、歌唱、弾き歌い、ダンス、舞踊

【共通科目】

専修(専攻)ごとに課される試験科目は異なります。詳しくは大学案内68ページをご覧ください。

演奏・創作学科 声楽専修

ピアノ

それぞれの専攻を専門的に学ぶ上で必要なピアノ基礎能力を判断するため、古典ソナタ・ソナチネの第1楽章、又はバッハのインヴェンションを課題としています。

入学後に必要とされる基礎テクニック、様式感、楽曲の分析力、そして豊かな表現力の備わった学生を選ぶことを目的とします。

演奏・創作学科 作曲専修

音楽文化教育学科

音楽文化教育専攻 音楽教育専修

音楽文化教育専攻 音楽療法専修

幼児音楽教育専攻

ピアノ

各学科、専修(専攻)の学修に必要なピアノの基礎力を判断するために、古典ソナタの第1楽章を課題としています。

古典ソナタの第1楽章は、基礎能力(テクニック、楽曲の分析力)などを判断するのに適した内容であり、その上で音楽性の豊かな学生を

選抜することができます。

音楽文化教育学科

音楽文化教育専攻 音楽教育専修

音楽文化教育専攻 音楽療法専修

幼児音楽教育専攻

声楽

イタリア古典歌曲、日本歌曲を課題として歌い、表現力の豊かさを問います。音程、リズム、フレージング、発声等、入学後に必要な基礎力について判断します。

電子オルガン

指導するために必要な音楽力、演奏及び表現力の基礎が備わっているかを問います。

演奏・創作学科 鍵盤楽器専修

聴音

音楽家の基礎能力として必要な、「音楽を聴き取る力」が、十分な水準に達しているかを判定する目的で行われます。

下記の3つの形式で出題されます。

- 1) 単旋律聴音:複雑な音程やリズムを聴き取る能力を問います。
- 2) 複旋律聴音:2声の聴音です。複数の旋律を聴き分ける能力を問います。
- 3) 和声聴音:3~4声の和声聴音です。垂直的な和音の響きと、水平的な声部の動きを聴き取る能力を問います。

楽典

本学での学修を開始するにあたり、基礎的な音楽理論や音楽的な常識について、その理解が十分な水準に達しているかを判定する目的で行われます。具体的には、音程、音階、調、調判定、移調、和音の種類、楽語、音楽史的な知識などについて出題されます。

新曲視唱

音楽家の基礎能力として必要な「読譜力」と、「音楽表現力」が、十分な水準に達しているかを判定する目的で行われます。

具体的な審査の基準は次の4項目です。

- 1) 楽譜を正確に読み、歌えているか。
- 2) 旋律の背後にある調性や和声を理解し、感じているか。
- 3) フレーズや音楽の流れを把握し、曲の構成を意識できているか。
- 4) 無理のない発声であるか。

*一般選抜(A日程)は、大学入学共通テストを利用しています。2025年度入学者選抜では「国語」と「外国語」の試験しか受験できませんでしたが、2026年度入学者選抜から「外国語」と「任意の1科目」を選択することが可能となります。詳細は2026年度募集要項でご確認ください。